

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 2章11～22節

¹¹だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。¹²また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。¹³しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。

¹⁴実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、¹⁵規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、¹⁶十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。¹⁷キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。¹⁸それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。¹⁹従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、²⁰使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、²¹キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。²²キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 4章27～42節

²⁷ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。²⁸女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。²⁹「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」³⁰人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

³¹その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、³²イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。³³弟子たちは、「だけれど食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。³⁴イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。³⁵あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言うておく。目を上げて畑を見るがよい。色づい

て刈り入れを待っている。既に、³⁶刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。³⁷そこで、『一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる』ということわざのとおりになる。³⁸あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている。」

³⁹さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。⁴⁰そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。⁴¹そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。⁴²彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

主イエスの食べ物【こども説教のために】

主イエスは、ときに「大食漢の大酒飲み」と揶揄されるほど、皆で食事をする宴会を楽しまれる方でした。人が、共に空腹を満たし、喉の渇きを潤すことを通して、お互いを大切にし合えることを、お教えくださったのです。

ところが、あるとき、弟子たちが町で食べ物を買って来て、主イエスに「**食事をどうぞ**」と勧めたのに、すぐに召し上がられないことがありました。「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」とおっしゃるのです。弟子たちは、「**だれかが食べ物を持ってきたのだろうか**」と思いましたが、そうではありません。ただ、そのとき、主イエスは、満たされていたのです。空っぽだったところが、満たされていたのです。

主イエスの空っぽを満たしたのは、一人の女の人との出会いでした。サマリア人と呼ばれる人々の町に住む女性です。主イエスをはじめとするユダヤ人とサマリア人とは犬猿の仲で、だれも交際しない関係でしたところが、町はずれの井戸端で、小さな出会いがありました。主イエスが一人でいるところにサマリア人の女の人が水を汲みに来たので、主イエスは、彼女に「水を飲ませてください」（ヨハネ 4:7）と声をかけたのです。そこから会話が始まりました。最初は戸惑っていた女性も、徐々に打ち解け、主イエスを信頼できると思い始めました。そして、今、彼女は町の仲間のところに行って、主イエスのことを伝え、「**見に来てください**」と誘おうとしているのです。きっと、町の人たちとも親しく語り合い、信頼し合える仲間になることができるでしょう。主イエスの中の空っぽが、満たされたのです。

わたしたちも、主イエスの空っぽを満たしたものをいただきたいのです。

「見に来てください」

わたしたちの教会が主日礼拝をインターネットでライブ配信するようになって、すでに4年以上が経ちます。ライブ配信のオンライン礼拝でわたしたちの教会に連なったださっている方も、少なくないようです。もしかすると、ご自身を名乗ることもなく連なったださっている方もあるかもしれません。今は、そのような方も含めて石神井教会という交わりが形づくられているのです。もちろん、一方通行にこちらから発信したものを受け取っていただいている、という側面があることは確かです。それでも、受け取ったださった方が、いつか良いときに、何らかの形で、こちら側に向けて発信してくださることもあるでしょう。また、日曜日の朝の礼拝堂にまで足を運んでくださるようになることも、きっとあるでしょう。時間がかかっても、そのように相互の交わりが形づくられていくのではないのでしょうか。

何でもインターネットで受け取れる時代です。わたしが24年前に神学校を卒業して教会に仕えるようになった頃には、まだ想像もできなかったことです。いつでも、どこでも、国内外の教会が発信している礼拝にインターネットでアクセスすることができるようになって、牧師職にある者が抱えていたある種の孤独は、ずいぶん解消されたと思います。自分と同じ職務にある者の働きを、いくらでも見ることができるからです。それによって、どれほど励まされ、また慰められていることかと思います。しかし、それは、信者の皆さんであっても同様でしょう。世界中の同じ信仰に生きる者たちの姿を、今は、インターネットを通していくらでも見ることができるのです。直接会ったことがなくても、まるでずっと以前から知っていた人のように、親しく名を憶え、その人の語り振舞う姿を思い起こすことができるのです。

もちろん、インターネットで画面越しに見ているのと、直接顔と顔を合わせて会うのとでは、大きな違いがあります。画面越しでは切り取られた情報しか相互に得られないのですから、当然でしょう。そうであればこそ、わたしたちは、なお直接お会いすることを大切にしているのです。機械の操作ひとつで簡単に断ち切ることでできる関係ではなく、相手と直接向き合うときに起こるすべてのことを通して、互いを認め合い、受け入れ合う関係を築いていきたいのです。

すべての人とそうすることができないとしても、まず目の前の一人とそのような関係を築いていく。そのような関係を築いていくことを諦めない。そして、でき得るならば、もはや関係修復が不可能だと思われた相手との関係をも、もう一度築きなおしていく道を探し求める。

それが、主イエスのお教えくださった道なのです。サマリアの女が、その町の人々が、そして弟子たちが、主イエスに続いて歩んだ道なのです。

隔ての壁を取り壊して

弟子たちの教会が歩みを始めたとき、今日の福音書に伝えられているサマリアの女性や町の人々も、その群れに加わったのでしょうか。もちろん、そうなったのでしょうか。そして、ユダヤ人の大切にするエルサレムの神殿でもなく、サマリア人の大切にするゲリジム山の神殿跡でもなく、ただ主イエスの行かれた道に従い、主イエスとの結びつきを共にする者たちの集まるところで、ひとりの神を礼拝するようになったのでしょうか。

それは、当時の彼らにとって、どれほど驚くべき、どれほど画期的な、どれほど新しいことであったかと思えます。それは、今のわたしたちの生きる時代であれば、どのような事態を意味することなのでしょうか。

互いに相容れないこと、受け入れ合えないこと、対立していること。わたしたちの生きる世界には、数知れない分断があり、高い壁が幾重にも広がっています。たとえ「わたしは分け隔てしない」と信念をもって生きている者であっても、越えられない壁が存在するのです。壁は、双方が取り壊すことに合意しなければ、いつの間にか築かれてしまうからです。実のところ、わたしたちの間に存在する壁は、放置しておけばいつの間にか、高くそびえるようになる代物でもあるのでしょうか。両者の間だけでその壁を取り除くことは、とても難しいのです。仲介者が必要なのです。双方を隔てる壁を取り壊し、両者を結びつけようと、ときに命をかけて行動してくれる存在が、必要なのです。

キリストは、**二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊して**くださったと、使徒パウロは言います。**双方を御自分において一人の新しい人につくり上げて平和を実現して**くださった、と言うのです。それが**神と和解**させていただくことだ、とも言うのです。

主イエスは、わたしたちの間にある隔ての壁を取り除くために、そして、わたしたちを神と和解させてくださるために、ご自身の命をかけて、お働きくださいました。大きなお働きをしてくださいました。

けれども、主イエスは、小さなことからお始めくださいました。顔を合わせても挨拶もせず、会話をすることもしないで済ませることもできたサマリアの女に、ひと言、声をかけられたのです、「水を飲ませてください」と。その人が驚くようなひと言を發せられて、返ってくる言葉を待たれました。何か特別に気の利いた言葉をかけられたわけでもなく、主イエスは、彼女とどこか戯言のような会話を交わし始められました。けれども、そこから始まったのです。彼女との間の壁が越えられ、サマリアの町の人々との間の壁が取り壊されるに至ったのです。弟子たちは、そこに招かれました。わたしたちも、そこに招かれてきたのです。